

とある雪山にて

- 岡田 寒いな。
- 佐藤 岡田さん、マッチを持っていませんか。
- 岡田 あるよ。
- 佐藤 ありがとうございます。これで小屋の中も暖まりますね。
- 岡田 それにしても、どこからか風が入ってきていないかな。
- 佐藤 あっ。
- 岡田 どうしたの。
- 佐藤 ドアが開いて、閉まっていますよ。
- 岡田 また開かないように、ちゃんと閉めておかないと。
- 佐藤 済みません。
- 岡田 ふう。何だか暗いし、怖いね。
- 佐藤 吹雪の音も嫌ですね。
- 岡田 そうだ、こんな話を知っているかい。
- 佐藤 何ですか。
- 岡田 「動く死体」だよ。
- 佐藤 どういう話ですか。
- 岡田 ある雪山で遭難した登山者がいた。外は吹雪で、下山は無理だった。天候がよくなるのを待ってはいたが、ここまでたどり着くだけでも相当の体力を使っており、空腹も手伝って、既に限界が近かった。ふと、男はポケットに手を入れると数枚の非常用のビスケットがあるのに気がついた。しかし、その男はそれをもう一人には知らせなかった。そして、外の様子を見てくると言い、食料を食べたんだ。気がつくやうに、もう一人は衰弱し、ついには息を引き取った。男は苦悩したが、仕方がないことだとその死体を寝袋に入れ、外へ埋めに行った。それらをすべて終え、眠りについたが、目を覚ますと恐怖に体を震わせた。
- 佐藤 埋めたはずの男が横にいたんですね。
- 岡田 あっ、この話を知っているの。
- 佐藤 はい。生きていて、自力で帰ってきたんですね。
- 岡田 いや、それじゃあタイトルの意味がわからないでしょう。
- 佐藤 あっ、わかりました。ゾンビだった。
- 岡田 いや、もっと現実的な話だよ。
- 佐藤 あっ、全部が夢だった。
- 岡田 違うね。
- 佐藤 何ですか。